

『西鶴諸国はなし』の原質(二)

— 軽口咄の方法 —

一 はじめに

『西鶴諸国はなし』の原質」と題したこの一連の試みは、『諸国はなし』の分析を通して「西鶴の咄作りの原初形態」を探り、「西鶴の咄作りに見られる独自性」を明らかにし、最終的には『諸国はなし』全体を総体として捉え直そうとするものである。ただ「原質追究」という課題に取り組むに際しては、問題がある。前稿『西鶴諸国はなし』の原質(一)⁽²⁾でも指摘したように、本書が題材・方法ともに多岐に亘り、一つに括ることのできない説話集であるという点である。そこで、この試みにおいては原質⁽¹⁾と言えるものを探る手掛かりとして、先に報告した書誌調査による成果⁽⁴⁾を利用したいと思う。そこでの結論をかいつまんで言えば次のようになる。本書には白丸点や柱など、他とは異なる書誌的形態を持つ四つの咄(卷三「行末の宝船」・「八疊敷の蓮の葉」、卷四「力なしの大仏」・「鯉のちらし紋」)が認められるが、これらは成稿・彫刻の時期が他の三十一話とは異なり、他に先行する可能性が高い、というも

のである。

書誌調査による成果を直ちに作品研究に当てはめることは無謀である。だが一定の条件を満たすことができれば、手掛かりの一つとして生かすことは十分に可能であろう。その際には「書誌形態の異なる話群の咄には共通するものが認められるのか、認められるとすればそれは咄削りの原質という尺度と接点を持ち得るものなのか」が、まず問われねばなるまい。その上で初めて、四つの話は『諸国はなし』全体の中にとのように位置づけられるのか、という問題に向き合うことができ、この問題の検討を通じて『諸国はなし』論への新しい切り口が見えてくるものと考ええる。以上の理由からこの試みにおいては、四話の共通性を探ることを作業の第一段階とした。

ところで、四つの話のうち「八疊敷の蓮の葉」については、素材と方法という側面から取り上げたことがある⁽⁵⁾。更に前稿『西鶴諸国はなし』の原質(一)⁽²⁾では卷三「力なしの大仏」を取り上げ、その創作方法を分析すると共に、「西鶴の軽口咄の独自性」という視点からその特徴を抽出した。そこで本稿では残る二話について、主として方法上の分析を通

宮澤 照 恵

してその性格を明らかにすることを目的とする。その際、右に述べた四話全体の共通性を探るといふ問題意識を念頭に置いて、論を進めたいと思う。

本論に入る前に、前稿において本稿への橋渡しのためにまとめておいたことを確認しておく。「力なしの大仏」の分析結果を、「諸国はなし」の他の話との違いや四話のグループ内における比較、及び咄の原初性」といった問題意識に基づいて整理した、次の五点である。

- 1 パターンにのつとつた単純な構造を持つ軽口の咄で、周知の話材を見える形で扱うなど、分かりやすい咄である。
- 2 現実から次第にウソに運ばれていく法螺咄で、ウソに至る語り口が秀逸である。
- 3 当代の軽口咄とは異なり、咄の最後に日常を配して、現実に引き戻している。
- 4 題材を生かしたまま当世化・転合化・教訓からの離脱が行われている。
- 5 挿絵の戯画性が際立つ。

右の特色を念頭に置きながら、次章以下では残る二話の分析を行い、次稿に予定している四話のグループ・ピングをめぐる検討のための準備を整えたいと思う。

二 行く末の宝船

ここでは巻三の五「行く末の宝船」を取り上げる。初めにこの咄のあらすじを示しておく(便宜上三つに分け、それぞれA〜Cの符号を付す)。

A 諏訪湖の神渡りが済んだ春先に馬方の勘内が強引に氷の上を渡ったところ、中ほどの所で俄に氷が溶けて彼は湖水に沈む。

B その年の七月七日、突如光り輝く船に乗った立派な姿の勘内が現れる。初めは不審に思った村人であるが、次第に彼の異境咄に引き込まれ、最後には自分たちも童の国に行きたいと先を争うことになる。七人だけが乗船を許される。

C 出船間際に一人の男が心変わりして留まった。それから十年あまり音沙汰もなく過ぎた。「六人の後家」は嘆き暮らし、間際で分別した男は目安書になって今に長らえている。

以上の咄の中心は、勘内の繰り広げてみせる異境咄に少しづつ引き込まれていく村人が、ついには我先に「あの国」に行きたがるに至る、Bの直接話法を生かした展開にある。つまり、「非現実のウソが先行して示され、周囲が次第にそれを受け入れ同化していく」という部分である。この咄の方向は、先に論じた「力なしの大仏」における「現実から次第に架空咄(ウソ)へ」という方向とは丁度逆の行き方である。ベクトルの向きは逆であるが、しかし「語り口によって非現実の空間に誘い込む」という底を流れる姿勢は、何ら変わるところがない。

やや煩雑になるが次にBの部分を取り上げ、周囲をウソに引き込む「勘内の話の妙と、聞き手の反応が次第に変化していく様をテキストに即して見ておこう(以下版本テキストの引用にあたっては、表記を改めた部分がある)。

(一)

七夕の暮れ刻、湖の沖から光輝く宝船に乗って現れたのは、「見慣れぬ」人々であり、半年前水死した筈の勘内が「高き玉座に居て、そのゆゆしさ、昔に引き替、皆々見違へるほどである。信じがたい光景。かつての暴れ者は、「心静かに」振る舞う。わけを尋ねる役割は、かつての仕事仲間以外にない。

「(勘内が)前につかはれし親方のもとに(挨拶に)行くと」という一言が挿し挟まれる。それを境に勘内を取り巻く相手は、「皆々」(岸边に居合わせた村人達)から「いずれも」(勘内のかつての仕事仲間)へと移行する。このことは同時に、閉じられた咄の空間が設定されたことを意味し、これ以降の対話による展開を可能にする。

この時点がかつての仕事仲間は、初めに勘内一行を迎えた村人達と同じ此岸のものとして、いわば村人を代表する形で、異界(彼岸)から来た勘内に向き合うことになる。しかし会話の進行と共にいつのまにか両者は融合して行き、彼此の区分は次第にうち捨てられていく。その次第は次のような展開となる。

いづれも驚き様子聞くに、それがし只今は、竜の中都に、流れ行きて、大王の買物づかひになりて、金銀我がままにつかまつる

と、金銭二貫くれける。

金を貰えば、周囲の目つきが変わろうというもの。俄然話は熱気を帯び具体的になつてくる。

さて爰元より米も安し。鳥着は手とらへにする。女房はより取、旅芝居の若衆もくる。はやり歌の、やろかしなの雪国をうたひあかして、寒ひともひだるひとも知らず。正月も盆も、爰とすこしも違ふた事なし。十四日から灯笼も出して、爰と替つた事は、借錢乞といふ者をしらぬと申。

竜宮がいかにかユートピアであるか、勘内の弁舌はよどみない。あまりに現実離れた夢の楽園だからといって「見知らぬ異界」と心配するには及ばない、馴染みの流行歌も旅芝居も盆正月もこのこと変わらぬと、「灯笼」「借錢乞」などの具象を交えて、未知への恐怖心を和らげる配慮も巧みに織り込んでいく。

さてその盆であるが折しも七月、勘内にとっては新盆である。

我初めての盆なれば、ひとしほ馳走のために、国中の色よき娘十
四より二十五まで、いまだ男を持たぬをすぐりて、大踊のこしらへ、それはそれはまたあるまじき事也。其用意の買物にまいつたと申。

勘内はここで初めてその来意を明確にする。呼吸をつかんだ間合いで

ある。既に話に引き込まれている男たちは得心し、羨望の念を禁じ得ない。当初「見慣れぬ人あまた」と表現された異人たちは、まさしく勘内が買物のために「召し連れしものども」だったのだと認定される。その上で「何とやら磯臭く、かしら魚の尾なるもあり。螺のようなるもあり」と変わった風体に改めて気付くその視線は、既知の者に向けるそれに変化している。異様な、形容しがたい未知の姿形に対して「言葉」を与えたことで、彼らの存在を認識し受け入れたと言えよう。更には、(なるほど、そう言えば竜宮から来ただけあって、どことなく……)と、変わった風体であることがむしろ勘内の話を裏づけ、説得力を添える方向で受け止められてくる。

この異人たちの描写が出現時になされていれば、未知に遭遇した村人の側に観察し説明するだけの余裕があったことになる。異人たちをスケッチすることによって、当初の彼らの驚きは、そのエネルギーを殺がれていた筈である。勘内の竜宮咄が一段落したところで初めて同行の異人たちに目を向けさせるのは、なるほど西鶴の手腕と言えよう。

後述するように、勘内に課された使いの真の使命は「万の買物」などではなく、実は生きた人間を調達することにあつた。見違えるほどの立派な姿形、二貫の金、更には蠱惑的ユートピア咄で十分人々を引きつけておいて、最後の餌はやはり色と金であつた。

勘内が何気なく洩らす「あの国の女のいたづらを皆々見せましたい事じゃ」に思わず飛びついた「それはなる事か」に対し、勘内は「それがしのままなり」と請け合う。その上土産に「船いっばいのしろがね」まで保証する。ここまでくれば欲に勝てる男はいない。しかもわずかに「十日ばかりの暇入り」で済むというのだ——勘内はうまいことやつてあの国の住

人になつた、昔の馴染みで少しぐらいそのおこぼれを貰つてもいいじゃないか、どうやら竜宮への行き来は簡単にできそうだ、ちよつと行つてすぐ戻ればいい——。かくして人々は勘内の話に疑念を抱くどころか、「我は常々のよしみ、人よりは懇ろしたと、行事を争ひける」ということになる。立場の強弱は逆転した。人選に漏れた者は「取り残されし人」と表現される。¹⁶⁾

親方を初め、その中^{ついで}で七人伴ひける。取り残されし人是を嘆きしに耳にも聞き入れず、くだんの玉船に乗りさまに

「耳にも聞き入れず」の一語に、選ばれて勝ち誇り得意になつて七人と冷静な勘内の対比が読み取れるところである。¹⁷⁾

以上、勘内の巧みな語り口と周囲がそれに引き込まれていく様が、無駄のない筆致で描かれている。勘内の用意した「色と金」という餌は、四方四季など居ながらの美景を強調し、雅の世界を繰り広げる伝統的竜宮描写の当世化と言えようが、言い換えれば万人に共通する欲望に直截に応えるものであつた。日常語で語られる単純でわかりやすい即物的なユートピアが、そのためにかえつて説得力を持ち、その場にいる人々を惹きつけ、架空のウソ咄であることを忘れさせたのである。

(二)

(一)では、周囲を架空咄に引き込む様を、直接話法を生かした表現の上からたどつた。ここでは西鶴の作意に焦点を当てて構想の骨格を明

らかにし、転合化や当世化といった咄創りの方法を考えたい。

「霊還り」と「竜宮譚」の取り合わせ

初めに先に示したAとCに従って、全体を貫くイメージが意図的に用意されていることを確認しておこう。

まず馬方の勘内が湖水に沈んだ、というAのエピソードであるが、テキストには

まん中過ぎほどになりて俄に風あたたかに吹て、後先より水消へて、浪の下にぞ沈みける。この事かくれもなく、哀れと申しはてぬ。

とある。遺体はあがらぬものの水死したことは自明である。ここでは章首に置かれた格言「人間ほど物のあぶなき事をかまはぬものなし」と重ねて読むことで、「危険(を省みない)——死」の繋がりが印象づけられる。

Bの勘内の出現から村人と共に船出するまでの部分では、一連の盆行事の始まりでもある七夕の日が発端となっている。更に、勘内が村人に「あの国」のすばらしさを披露した後、続いて紡ぎ出されるユートピアは、「十四日からの灯籠、初めての盆、いろよき娘達の大踊、用意の買い物……」と、実は最終的に「盆」に収斂していくものであった。間近に迫った盆——このイメージを揺るぎないものにしてるのが、挿絵に描かれた「麻幹・盆提灯・団扇・芋の葉・蓮の花と葉」であろう。このように見れば、一話の中心となるBの部分からは、おのずから「盆・霊還り」

というキーワードが抽出されよう。

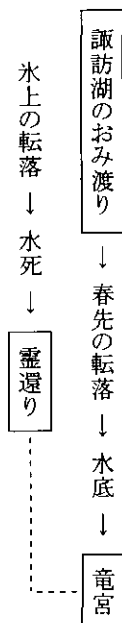
これに続くCの部分を支配しているキーワードは、どのようなものであろうか。分別した男は「命に替へるほどの用あり」と言つて宝船から降り、十年あまり経つてみれば(六人の残された)「後家」は嘆くばかり、(二人行かぬ人は)「今に命の長く」と、「命」という言葉が繰り返され、ここでも死を内奥に含んだ表現が展開の梃子となっていることに気付かされる。事実船出した六人は彼岸に旅立ち、二度と戻らなかつたのである。

以上、直接「死・彼岸・黄泉」といった表現は用いられていないが、この咄には始めから終わりまで一貫して「死」のイメージが置かれており、盆の霊還りを踏まえた咄創りであることは明白である(但し霊還り本来の意味は解体させられている)。挿絵に描かれている盆の必需品の数々は、こうした全体を貫くイメージのため押しであり種明かしであると言つてよからう。

本話創作の要となつているもう一つの要素は、言うまでもなく水底の楽園、即ち竜宮譚である。(水中に沈んだ者が)「竜の中都に流れて」という表現から竜宮を思わない読者はいるまい。事情は作中の村人達にとつても同様である。「召し連れしものども何とやら磯臭くかしら魚の尾なるもあり、螺のようなるもあり」という表現は、視覚化された戯画と相俟つて、いよいよ勘内が水底の王国竜宮から来たことを確信させる(ちなみに「俵の藤太物語」寛永頃版本・寛文九年版・江戸初期絵巻等)に見る竜宮の眷属は、本話の挿絵に描かれる「召し連れしものども」と同類である。同時に勘内の姿は、絵巻や絵入り本の浦島太郎

そのままである)。これまで本話の素材として、幽界から現世に訪れる『剪燈新話』の「修文舎人伝」や、『伽婢子』の「竜宮の上棟」が指摘されている。しかしそれ以前に、本話からは浦島子や依の藤太の伝承を思い浮かべるのが自然なわけではなからうか。出の展開を受け入れる前提として竜宮譚が効果的に働いているわけで、明らかに竜宮譚に依拠した咄創りになっているのである。

西鶴の咄創りの方法という主題に戻れば、凍結した諏訪湖を渡る際、時に生じたであろう転落水死者の話から、水底にあるという竜宮伝承を連想し、そこに水死者の霊還りという思いがけない要素を取り合わせて一話に仕立てたもの、と捉えてはほぼ誤りはあるまい。この咄の構想の核になっているものを示せば次のようにならう。



右の繋がりのうち、途中までは無理のない連想の上に立つのであるが、点線で示した部分は結びつきに無理がある。竜宮は異境ではあるが、本来死を忌み嫌う場でもあつて、霊還りとは繋がりにくい。飛躍とも言えるし、取り合わせの妙とも言える。この竜宮伝承と霊還りを結びつけたところに、それまでの竜宮譚や蘇生譚とは全く異なる西鶴の咄の核ができたのである。

つけ加えれば、右図のうち諏訪湖と竜宮の取り合わせにもひねりがある。竜宮と言えは、まず「勢多・丹後」が連想されるが、思いがけず舞

台を諏訪湖に設定しているのである。付き過ぎを避け飛躍のおもしろさをねらったものであることは疑いない。と同時に、土地と結びついた伝承を思い合わせれば、「諏訪縁起」で馴染み深い地獄巡りのトーンを、水死者の竜宮漂着及び男達の死に向かう船出に重ねている、と読むことも可能であろう。暴れ者が転落していった黄泉の国という思いがけない設定も出所が見えてくるようである。そう言えば「竜国」で勘内が仕えているのは「大王」と表現されており、想像を逞しくすれば西鶴はここで「閻魔王」を重ねて、ほくそ笑んでいるのかもしれない。ただし縁起の性格とは結びつかない自由な発想であることは確認しておきたい。勘内の語りの中に流行歌の「やろかしなの雪国」を添えているのは、土地の設定に際しての西鶴の挨拶であろう。

竜宮譚の転換

大枠を把握したところで、次に竜宮譚を睨みながら、西鶴の転換化の様相を確認しておこう。竜宮伝承の定型は、「恩返しに竜宮に招待された主人公がもてなしを受けた上、土産物を貰って再び人間界に送り届けられる」、というストーリーである。本話ではどうか。先に確認したように、竜宮は黄泉の国である。勘内は招待されたのではなく無鉄砲さと無精によつて自分から落ちたのであり、土産を貰って送り届けられたのではなく「自分の新盆（「我初めての盆なれば」）の準備のために」此岸にやつて来たというのである（既に荒唐無稽な設定であるが、語り口に乗せられてしまうのは、先に見た通りである）。

実際には勘内の真の使命は、村人への説明とは別なところにあった。此岸に戻った目的は「万の買物」を整えることではなく、生きた

人間を調達することにある。いわゆる竜宮譚とは逆に、「竜宮へ土産を持つていく」のであり、その土産とは勘内によって選ばれ、彼の口車に乗せられた六人の男達なのである(ちなみに竜宮からの土産は玉手箱の他に珠や絹がポピュラーであり、「俵の藤太物語」では、鎧・太刀・赤銅の釣鐘となっている)。ただし、このとき既に仲間達には二貫の金銭を渡しているから、この土産も勘内に言わせれば「万の買物」の一つという理屈が成り立つかもしれない。

又竜宮(黄泉の国)に連れて行った男達について、テキストに「親方を初め」とあることに注意したい。勘内が調達した人間の筆頭に、世話になつた筈の「親方」が置かれているのである。こんなところでも、西鶴は竜宮譚に共通する「報恩モチーフ」を引つ繰り返しているのである。

さてこの世の側から見れば「竜宮行き」は、定型通り選ばれた人間が招待され接待を受けた上で土産を貰い、かつ無事に送り届けられることを意味する。村人の側にその共通理解があればこそ、この咄は成り立っているのである。しかし男達は竜宮に行つたきり二度と戻つてこない。「死」を意味することは、残された「後家の嘆き」という表現に明らかである。竜宮譚を基にした荒唐無稽な俳諧化であり、登場人物達もそれに騙されてしまったのである。繰り返せば、それを可能にしているのは勘内の語り口であつた。

ところで本話は民話の「博労やそ八」を典拠とするという説を井上敏幸氏が出されている。創作方法と係るので、簡単に私見を述べておく。「博労やそ八」では誰も実際には竜宮に行つていない点、やそ八は旦那を殺し自分がその後がまに座る点で、本話とは距離があると考ええる。人口に膾炙した、竜宮譚や異境咄及びそれらと此岸との往還咄を

引つ繰り返すところに本話の焦点があるわけであるから、ヤソ八咄をもとに西鶴がこの咄を創つたとは考えない。確かに勘内の職業及び性格設定は、やそ八に類似する。しかし類似は典拠であるための十分条件ではない。一方自ら死を招いた無謀さ、湖上を頻繁に行き来する職業、蘇生したときの落差による効果、男達を水底に運ぶ使命、独り身という条件など、本話独自の展開を考えれば勘内を暴れ者の馬方としたのは必然の帰結である。西鶴がこの民話をよく知つていて何らかの影響を受けた可能性があると仮定しても(書承の裏付けによる立証は困難である)、典拠とするのは当たらないと考える。

「好色」の配置と効果

竜宮の描写にいわばユートピアの日常語への翻訳、当世化が見られることは(一)に見たとおりである(四方四季や眷属達の舞、時間の流れ、乙姫の美しさ、もてなしの様々など、伝統的竜宮ユートピアと並べてみれば、西鶴の取捨選択と当世化は一目瞭然である)。ここでは当世化の手法の一つである「好色」に目を向けておく。

これまで指摘されてはいないが、Aで示される「根引きの勘内」という命名は身請けに繋がる遊里語を掠め、「それぞれの家庭(女房)という根がついたまま男達を引き抜く」という展開に繋がるものと言える。Bでは、勘内の誘いの目玉が先に見たようにまさに「好色」であつた。更にCの後日譚では、亭主の浮気心がもとで「後家」にさせられてしまった女達の嘆きを配している。「此六人の後家のなげき」と、わずか十文字で示されるのみであるが、実に多くを語つているように思われる。

単に夫に先立たれた妻の嘆きではない。夫の軽率な浮気心の一番の

被害者は妻であり、一連の咄の展開を引き取る恨みの籠もった嘆きである。出船の時には気付かなかつたが(注6参照)、「異境の一日は此岸の一年に匹敵するとか……そうであれば、十日といつて出かけたのだから、もう少ししたら土産を持つて、年を取らぬまま戻ってくる……」(注6、注10参照)そう言い暮らして、あたらしい女の盛りを十数年も無為に過ごしてしまつた、こんなことなら再婚でもするんだつた……。そんな女の側からの空聞の恨みを「此六人の後家のなげき」という一言に読みとるべきである。ここに遺族の嘆きとして、親兄弟を持ち出していいないことを見逃してはならない。

西鶴は、Bの勘内の語りの中で、「女房はよりどり」、「国中の色好き娘」、「あの国の女のいたずら」と言葉を使い分け変化を持たせて、男の視点から好色を配してきた。その流れに続くいわば仕上げとして、女の視点からの好色を配したのである。

右に見たように、西鶴は一話を通じて脚色の小道具に「好色」を効かせている。そのことによつて、怪異や縁起に結びつき得る題材からシリアスな要素やメッセージ性が殺ぎ落とされ、現実味や滑稽味が生じているのである。

以上、表現を手掛かりに西鶴の咄の創り方を考えてきた。これまでに示した操作のそれぞれは、「連想・取り合わせ・飛躍・転換・滑稽化・当世化」などと名づけてよいものである。ひとことでは言へば、素材の転換化と位置づけて間違ひは無からう。まさに句作りの手法そのものである。もっとも当世化のみ(或いは滑稽化のみ)を問題にすれば、この一話だけに限つたことではなく、西鶴作品の至る所でお目にかかる。し

かし、上記の手法のすべてが構想や表現を貫く基本的方法になつてゐる作品は、非常に限られてくる。本話は、まさに俳諧的咄創りに貫かれてゐる一篇と言えよう。

ところで連想や飛躍を身上とする俳諧的咄創りでは、個々の部品(挿話)を連結し統合する役割を担う要素が不可欠となる。詳述する暇は無いが、その一つとして草首に置かれた格言「人間ほど、物のあぶなき事を、かまはぬものなし」に触れておく。

この言葉はすぐ後に続く、春先の薄氷の上を渡るなどという危険を省みない行為によつて命を落とした、勘内の無謀な振舞いを指している。しかし後半を読むと、同じ格言が人の陥りやすい迂闊さ、日常に潜む危険について発せられたものでもあることが判明する。つまり勘内の甘言に乗せられてうかうかと「あの国」行きの船に乗ってしまった男達の迂闊さを取り出して見せ、その上でそれがいかに危険に満ちたものであるかを警告しているのである。同じことは、目録副題の「無分別」にも当てはまる。両者は個々の部品に密着しながら、同時に前半と後半とで別な意味合いに変容させられ、全体を貫く縦系の役割を果たしているのである。転換を含まずにいない「縦系」は、俳諧的咄創りの象徴と言えよう。

(三)

ここでは「閉幕後の現実回帰」という側面を取り上げたい。前節で触れた後家の嘆きに続き、いわば後日譚その二として、「また一人行かぬ人は今に命の長く目安書して世を渡りけるとなり」とある。そもそも土壇場で気が変わった男を設定すること自体、竜宮行きの咄としては

無くても構わない要素の筈である。その上メインの話に直接係らないこの男の後日譚を配置していることは、西鶴独自の方法である。

確かに話のパターンとして考えれば、「複数の死者のうち、ただ一人が助かり生還した」という類例は無いではない。人口に膾炙した話として説教の「小栗」を例に取れば、小栗が一人だけ蘇生できたのは、十人の家来が火葬であつたのに彼だけが土葬であり遺体が残っていたからだ、という整合性が用意されている。更に彼の蘇りが次の展開を呼び込む構造になつており、必然性を伴う「ただ一人の生還」である。それに対して本話の場合は、「分別」というキーワード以外何の説明もなされない。又この人物の存在が、咄に新たな展開を呼び起こすわけでもない。我々は、この人物を創作した西鶴の意図を読み取らねばなるまい。

この人物は、選ばれた側の人間であつたにもかかわらず土壇場で「分別」した人間である。つまり勘内の法螺咄の胡散臭さを見頭わした、ただ一人「分別」があつて命を落とさずに済んだ、危険を回避できた人物なのである。わずか三十二文字を最後に付け加えただけではあるが、効果は絶大であつた。この男の存在を付け加えることにより、誘いに乗つた男達を相対化し、咄の場の生き証人として七夕の夜の出来事を客観的に語る立場を獲得できたからである。同じ後日譚と言つても、後家が当事者の身内として直接の被害を被る立場にあり、それ故に咄の内側に位置しているのは対照的である。

男の今の職業を「目安書」としている点に触れておこう。「分別」と「公事沙汰」は付合(『俳諧類船集』)であるから、目安書は分別と繋がる言葉と捉えてよからう。また『大矢数』には次の付合が見られる。

吉野山色々分別めぐらして

目安のおくの谷の下つゆ

行水をはや算用やおきぬらん

大矢数一

このように「目安書」からは、「文字が書け、分別・律儀の代名詞のような人物」が導き出される。それだけにこの奇談の生き証人として信頼できることになる。冒頭の格言に端的に示された「あぶなさ」を見頭した「分別者」のその後の職業として、又信頼できる「生き証人」として、それ以外考えられない確な職業設定である。

この職業について、松田修氏の言及がある。回り道になるが、本話の解釈に係る問題と思われるので、簡単に検討を加えておく。氏は、「船出した者の愚かさに重ねて、船出せぬ者の愚かさをも西鶴は漏らさない。」として、此岸に留まつた男について次のように捉える。「行かずともその生は、たかだか筆耕で、あけてもくれても同じような文案で、命をすりへらしてしまうだけだ。行くも阿呆、留まるも「け——ま——ま——」ことそれは、苦きに失するさめた作家の目の業であつた」。

私見では、この読みは近代的に過ぎるように思われる。少なくともテキストの文脈では目安書きという職種は、「律儀・分別」という記号として読むべきであつて、そこに人生の空しさ・愚かさを読み取るならば、西鶴の目論見やこの咄の軽さから外れることになる(戯画・会話体・好色や金の扱い等々、テキストに従う限りこの咄はあくまで軽口の笑いと西鶴の咄創りの手法を楽しむべきであつて、「作者の醒めた視線」を読み取るべきではなからう)。

話を戻そう。分別した男は、咄に説得力を持たせると同時に、咄を

相対化する役割を持つていた。証人が生きていることで咄は今に連続すると同時に、過去の体験として閉じた非連続のものになった。証人は現実世界に位置している。西鶴は一話の中に、「座を設定し登場人物にウソ咄を語らせて周囲をその咄に乗せる」という構造を用意しながら、同時に「そのウソを見頭わし、咄が終結した後もそこに律儀に目安書しながら生きていく」という人物を用意しているのである。自分で創った法螺咄と同じ咄の中で相対化し、ウソに乗せられた一夜の夢を、生き証人の存在を通して自ら現実に取り戻している、と言えよう。この時、読者も架空咄から現実に取り戻されるのである。

以上、「行末の宝舟」をめぐる、語り口・構想・転合化・当世化・(閉幕後の)現実復帰、といった様々な方向から検討した。(一)〜(三)の手続きを通して、本話が絶妙な語り口であること、「周知の竜宮譚に依拠しながらそれを引つ繰り返してみせる」という作意に満ちたものであること、靈遣りという意外な要素を意味を解体させた形で取り合わせていること、咄を相対化する構造を持つことなど、俳諧色に満ちた西鶴独自の軽口の咄であることが明らかになったと思う。

三 鯉のちらし紋

ここでは巻四の七「鯉のちらし紋」を取り上げる。初めに「河内の国内助が淵」の地名起源説話を取る、この咄のあらすじを紹介しておく。

内助が淵の畔に内介という漁師が一人で暮らしていた。雌の鯉を飼っ

ていたが、いつのまにか鱗に巴の紋が生じて内介になつき、内介も特別に扱った。十八年もたつと十四、五歳の娘の背丈ほどにも成長した。ある時内介は女房を娶った。夫の留守に美しい女が駆け込んできて「お腹に内介の子供がいる。」と恨みを言つて脅した拳姿を消す。妻の問いに対し、内介は覚えがないと言う。翌日内介の船に大きな鯉が飛び乗り、口から子供を吐きだして消える。ようやく逃げ帰つてみれば、生け簀から鯉は消えていた。村人は「生き物に深く思いをかけるものではない」と語り合った。

本話の原拠については諸説あるが、大筋は『奇異雑談集』に見える「伊勢の浦の小僧、円魚の子の事」に拠ると考えて誤るまい。「ある漁師が釣った円魚を犯し海に放したが、十ヶ月後夢に円魚が現れて、岩の間にあなたの子供がいるから受け取るようにと言う。果たしてその通りだったのでその子を養育し、子は成長して庵の小僧になった。人のようではない。牛庵が見たときには十八才だった。」というもので、子供の存在に注目した牛庵の見聞として記される。『奇異雑談集』は貞享四年が初版で、それ以前の写本が確認されているものの書承関係は立証しにくい。しかし本書との内容上の繋がりは他にも指摘されており、拙稿でも取り上げたことがある。⁹⁸⁾又『奇異雑談集』は禅宗との関係が深く、説教の場を通じて版行以前から咄が流布していた可能性も高い。西鶴がこの話を知つていて原拠としたと考えて差し支えあるまい。もちろん背景には豊富な異類婚姻譚や魚女房咄の流れがある。また陸事に至らないまでも、井口氏が「鯉のちらし紋——『西鶴諸国はなし』試論」で紹介された、『列仙伝』の鯉を愛した男の話なども、或いは西鶴の念頭

にあつたかもしれない。

西鶴はこの題材をいかに脚色したか。魚類を愛した末に人でもなく魚でもない子供が産まれた、という大枠は『奇異雑談集』と共通している。つまり枠組みを見えなくするといった謎解きに類する咄の創り方ではなく、それを素直に利用し、一つ一つの挿話の運びや語り口を工夫することによって西鶴の咄に創り換えているのである。この咄を読み解き、西鶴の独自性を明らかにするには、やはり「どのように表現されているか」にこだわる以外あるまい。煩瑣なようではあるが、以下テキストを読み解いていきたい。

(一)

川魚は、淀を名物といへども、河内の国の内助が淵のさぎ迄、優れて見ける。この池むかしより今に、水の乾くことなし。

この冒頭で読者は「あの淀の魚より内助が淵の魚はうまいんだって？」とこの池に興味を持ち、池のいわれを知る者も知らぬ者も、「古くから水が乾いたことがない」とは何やら曰くありげな……と咄に引き込まれていく。視線が淀から河内へ一直線に飛び、土地に惹きつけるうまい導入である。続いてこのほとりに暮らす漁師が紹介される。「ひとつ家をつくりて」「笹舟にさほさして」「妻子も持たずただ一人」と畳み込む一人暮らしは、何やら世間との交わりの薄い、閉ざされた空間を保証する。奇談が醸成されていく条件が、章首部分で既に整えられたと言えよう。

内助が淵には当時何か伝承があつたらしい(注22参照)。今その詳細を追究する暇はないが、既に指摘されている『河内鑑名所記』(延宝七年刊)の次の狂歌は、示唆に富む。

もし魚に心をかくるものならハあみないすけか淵なのそいそ

重次

この内助が淵に、その名も内介という独身を通す変わり者が一人暮らす——この設定は、内助が淵起源説話のリニューアル化の宣言でもある。狂歌からも伺えるように、『奇異雑談集』の説話と何らかの接点を持つ伝承を背景に舞台を畿内に移し、スポットを半人半魚の子供の側ではなく漁師と鯉に当てて、ここに新たな地名起源説話を創り出すというのである。

上記のごとく土地と人物の紹介がなされた後、咄の発端が描かれる。内介も生身の人間であるから、色恋沙汰が無いわけがない。以下異類婚姻の枠に従って、発端から懐妊・出産(鯉の口から子供が吐き出される)までが、内介の結婚と雌鯉の嫉妬を絡め、滑稽・具象・怪異の色づけを施した形で展開する。まさに当事者間の生のやりとりを生かしながら、同時進行で進むのである。この間わずかに丁強、無駄な言葉は一つもない。

翻つて『奇異雑談集』では、先に述べたように円魚の子供の方に関心が向き、牛庵の不審に答える説明が庵主の一人語りでなされる。そこでは奇談の一部始終は子供の身の上話という形を取り、「魚を犯す——海に放す——十ヶ月後夢にその魚が現れる——夢の通り子供が岩場に置

かかれているのを発見する一子供を引き取る一人でも魚でもないその子は今十八才になる……」と、第三者が奇談を紹介する姿勢が貫かれる。当事者間の生のやりとりはない。本話がこれとは全く異なる姿勢で書かれているのは言うまでもない。

さて本話の語り口の秀逸さは、大きく三箇所の見せ場に集中している。第一は、発端から蜜月が十八年に及んだところまでの筆運びである。ここは前稿で扱った「力なしの大仏」の鍛錬場面と全く同じ手法と言つてよからう。即ち、あくまで現実ではあるが耳目を集める際立つた例から出発して、次第に咄がエスカレートしていき、いつのまにか架空の法螺咄に至るというものである。テキストを引いておく。

つねづね取り溜めし鯉の中に、雌なれどもりりしく確かに目見しるしあつて、そればかりを売り残して置くに、いつのまかは鱗に一つ巴出来て、名をともへとよべば人のごとくに聞き分けて、自然となつき、後には水をはなれて一夜も家のうちに寝させ、後には飯をもくひ習ひ、また手池にはなち置。はや年月を重ね十八年になれば、お頭掛けて十四、五なる娘のせいほどになりぬ。(傍線筆者)

ここでは、鯉と内介との親密度が進行していく場にかさわしく、主語はすべて省略され、閉ざされた空間の中で「いつのまかは」後には「後には」と、何の束縛も受けず限定されない三つの副詞(句)だけが時の推移を表す。「いつのまかは」に導かれる部分がいわば架空咄の出発点であ

る。いまだ現実に見聞する範囲に留まつている。初めの「後には」が第一の飛躍。「わらに包んでおくときている」という注釈もあるが、無意味である。ここは擬人化した法螺咄と読むべきところであろう。「一夜も家のうちに寝させ」と書いておいて色事の有無には触れない。どちらとも取れる思わせぶりの書き方である。次の「後には」が第二の飛躍。いよいよ人間に近づき、ただし「また手池にはなち置」と断っている。あくまで鯉は鯉、基本的には手池で暮らしているのである。この段階で逸脱しすぎないよう安全装置は忘れない。

そうして気がついてみれば、「はや年月を重ね十八年」の年月が過ぎた。ここは『奇異雑談集』にある「十八才の小僧」によって、原拠の子供の年齢を内介と鯉との蜜月期間に取りなし、ふとした出来心による一回性の契りという原拠の設定を、十八年かけた第三者の立ち入れない程の一体化した結びつきへと創り換えている。このことが次の、嫉妬に基づく怪異性を呼び込むことになる。次の展開への必然性を内包していると見えよう。

「十八年」はそのまま下の文に続いて、「十八年になればお頭掛けて十四、五なる娘のせいほどになりぬ」と誇張していく。限定されない時間の流れから「はや」に導かれる「気付き」。毎日一緒にいれば、その日々の成長は目に見えないが、改めて気付いてみると……。ここは内介自身の感慨である。と同時に「毎年一、二寸は大きくなるのだから十八年経てば年頃の娘の背くらいには成長しようというもの……」と、語り手の解説にもなっている(誇張があるとはいえず、鯉の年齢が身の丈で測られることを踏まえて説得力を持つ)。二つの視点を重ね合わせることで、誇張された背丈がすんなりと受け入れられてしまふ、そういう構造になつてい

るのである。更に「十四、五なる娘」という比喻は、本話の底を流れる好色の気分を背景に、内介と鯉との生活は夫婦のそれであったことを暗示する表現である^四。

以上、ここは限定されない時間の経過に伴って、内介と鯉が閉ざされた空間の中で何者にも邪魔されずに親密さを増し、現実を逸脱していく様が描かれているのである。

第二は、「あるとき」結婚したという一文を挿んで、その女房のもとへ「うるわしき女」が駆け込んでくるという怪異性を帯びた場面である。ここは構造上、第三に挙げることになる内介の語りと向き合っている。どちらも直接話を生かした語り口で、二つの部分が形・分量・内容共に対になっていることを意識して読み取るべきところである。

女は「水色の着物」に「立浪模様の羽織」という装束に身を包み、「大波」池」と縁語仕立てで女房を脅す。

我は内介殿とは、ひさびさのなじみにして、かく腹には子もあ
る中なるに、またぞろやこなたをむかへ給ふ。此うらみやむ事な
し。いそひで親里へ帰りたまへ。さもなくば、三日のうちに、大浪を
うたせ、此家をそのまま池に沈めん

鯉の化身であることは一目瞭然であるが、新婚早々の女房にとつては寝耳に水。加うるに「夜」。夫は漁に出て留守、女の方は脅し文句を言い捨てて「行方知れず」、というわけで「おそろしき」体験である。当然内介の口から説明を求めるといふ次の展開を呼び込む。

怪異譚に傾いたところを、西鶴は笑いに引き戻す。内介は怯える女房の訴えに対し、滑稽色を効かせた現実味を持って答える。語り口の第三の箇所である。

さらさら身に覚えのないことなり。おおかたその方も合点して見よ。この浅ましき内介にさようの美人なびきもうすべきや。もし在郷周りの紅屋針売りのかかにはおもひ当たることもあり。それも当座当座にすましかれば、別のことなし。なにか幻に身へつらん。

このとき内介の念頭には鯉の面影はよぎらない。「紅屋針売りのかか」については正直に告白していること、脅しの文句を気にも留めずその日の夕暮れにも漁に出ていることなどがその証であること、井口氏の指摘のとおりである^四。ただしその理由についての考えは、氏とは趣を異にする。

氏は「口からの受胎」というキーワードを媒介に、内介が相手を「人のごとく」思ったことはなかったからだ、と結論づけられる。「口からの受胎」という氏の論理については、根拠をインドの神話及び口から子を吐き出した点に求めておられるがいかがであろうか。鯉が口からものを吐く、という習性は日常目にするところであるから、鯉が子供を口から吐いたからといって、交わりの形態の根拠にはなるまい(『奇異雑談集』の記述に従って「開閉の動くを犯す」と捉えて不都合はない)。

ここで内介が鯉の懐妊に思い至らないのは、井口氏の言われるような「鯉との繋がりが終始弄びに過ぎなかつたせい」ではなく、妻を娶ったこ

とでそれまで可愛がついていたベットの存在を忘れるのと同じ心理によるものと考ええる。かつての第三者が介入しない十八年の間には弄びという意識ではなく、確かに鯉が「十四、五なる娘」のように思っていたのである。しかし結婚によつて、心情の変化と同時にその扱いも激変する。寝食が別になるのは自明として、テキストから伺えるのは、鯉が飼われる場所が「手池」から「生け簀」へと変化していることである。何気ない変化であるが、かつては他の魚とは別に手池に放し飼ひ、一夜明ければその日の水揚げと共に生け簀に投げ込まれている——内介にとっては自然なこの変化が、鯉には通じない。鯉の側の論理では、人間の女と自分は対等（人と魚は同一の土俵に立つ者）で、自分はあくまで他の女に内介を取られた被害者なのである。この間のギャップは大きい。

さて内介の側に鯉への思い入れがない以上、新妻の話を気に留めないのは当然であった。ここから話は本書巻二「水筋の抜け道」に見られるような恠気がらみの恠異譚に進んでもよいはずであるが、西鶴はここに笑いを織り込み恠異性を殺ぐ内介の返答を用意する。自分の過去の振舞いに疑いを持たない現実的な男の言葉は、自信に満ちていると同時に滑稽でもあり、正直な告白であるだけに説得力を持つ。聞き手はその当世化にリアリティを感じ、恠異がこの咄の主題ではないことを感得する。内介の返答の滑稽な現実的語り口は、見事に語り口の第二に挙げた「恠異性」と対峙し、一旦は恠異を打ち消すことに成功しているのである。

結末はどうか。恠気による恠異とそれを打ち消す現実世界の言葉との間に保たれていた均衡は、その夕暮れ突如破られる。妻の話を意に

介さず漁に出た内助の船の周囲が「俄にさざ波立ちてすさまじく」なり、「浮き藻中より、大鯉船に飛び乗り、口より子の形なるものを吐き出し失せける」。これが急展開による結末である。内助と鯉との間に、もはやかつての蜜月は戻るべくもない。かつて「とも恋」と呼び親しみ、年頃の娘の顔に見えていた鯉は、今や単に「大鯉」にしか見えない。「やうやう逃げかへ」つた内介にとつて、鯉は我が身に害を及ぼす異形の物と化したのである。

内介と鯉の婚姻譚は、『奇異雑談集』の話と同様、子を父親の手に渡すことによつて結末を迎える。しかし円魚が静けさのうちに岩場に子を産み去つたのとは対照的に、内介と鯉の場合は劇的緊張を必要とした。語り口の第一に挙げた「十八年の蜜月」が咄の中で生きて働き、当事者の一方だけがたやすく現実に戻つたのに、一方は恠異性を帯びてもとの世界に留まる。——このような両者が向き合つたままの状態（語り口で挙げた第二・第三の対峙）では、咄は動かない。この膠着状態を解消し、両者がそれぞれに現実に戻るためには、何らかの劇的な動きが必要だったのである。「女のごとは当座当座にすませた」という滑稽を含んだ語りから急降下する緊迫は、十八年の年月が一夜にして崩壊するドラマの幕切れであった。

とは言え全体の構造を見る限り、発端から蜜月、懐妊、出産、子を父親に託す、という一連のストーリーは、見事に型どおりになっている。西鶴は、周知の咄のパターンを逸脱せずに、しかし中身には豊富なドラマを詰めて、この咄を創っているのである。「やうやう逃げかへりて生け簀を見るに、かの鯉はなし」と付け加えることで、鯉が失踪し異類との咄が終結したことが明確になる。現実回帰が果たされたわけであ

る。

この後、「総じて生類を深く手慣れることのないとその里人の語りぬ」と第三者による評が添えられ、それまでの咄は相対化され過去のものとして閉じられる。一方の当事者である鯉の失踪と里人による評——最後に用意された、この二段階の操作によって、当世化を施され誇張された架空の咄を、意図的に現実へと引き戻していることは明白である。

「現実復帰」という視点から整理しておこう。内介は結婚という転機によって一足先に現実復帰を果たし、鯉との秘め事は忘れ去っていた。表現の上では直接話法の中に好色を取り合わせることで、彼の側の現実味を強化していた。鯉の方は劇的緊迫を経た後、生け贄からの失踪という手段によりようやく現実に戻る。最後に、第三者の評によって語り終えた咄を過去のものにし、読者を現実に戻している。

以上、本話の語り口を一瞥した。次節では構想及び作意に触れたい。

(二)

まとまりを持った散文として自立させるためには、何らかの構想なり主題なりといった骨組みが必要となる。本話の場合、それが『奇異雑談集』に見られる円魚の話であったことは既に見てきた通りである。すつかり西鶴の咄に創り換えられ、地名起源説話に仕立てられているものの、大枠は原拠の範囲や咄のパターンを逸脱しないものであった。ここでは当該咄の脚色の仕方を通じて、西鶴の仕掛け、ねらい(転合化)、咄の展開をもたらす内面の連想といった側面に注目しておきたい。

俳諧色の強い西鶴の作品の場合、問題とすべきは個々のエピソードの繋げ方であり、取り合わせの必然性であろう。即ち、異素材や独立した挿話をいかに取り合わせ、一つの大枠の中に溶け込ませるかという編集の手腕の問題である。ここでは、それぞれのモチーフ(部分品)は西鶴の手によって独自に秩序づけられることになる。個々の素材に付与されていた意味は変容させられ(転合化)、場合によっては意味自体が剥奪されて、新しい結合法に従って統合される。

こうした西鶴独自の操作は、本話においてもいくつか指摘できる。そのうち、土地の設定及び漁師の命名については、(一)において「伝承を下敷きにした咄のリニューアル宣言」と「地名起源説話の枠組設定」という観点から触れたので、ここでは省略する。また当世化の様相や好色の色づけ、十八才を十八年に取りなしたことなど、これまでに触れた点についても繰り返さない。

さて、当該の咄において架空咄に推移していくための大きなモメントになっているのは、語り口の第一に挙げた年毎の魚の成長と目印という二つの要素である。それに関連して「円魚を鯉に仕立てている点」、及び「目印に巴の紋を取り込んでいる点」が西鶴の新案である。これらの意味を解明することが、創作方法に迫る切り口の一つになり得よう。以下では、右の操作を手掛かりとして、西鶴の構想及び作意を探りたいと思う。

円魚を鯉に仕立てる

円魚とは何か。架空の魚なのかどうか、今つまびらかではない。対するに、鯉に関する当代の情報には事欠かない。曰く食材として(鯛より

も)高級魚である、曰く鱗うろこことに小黒点あり鱗に十字の文理あり、曰く年数と体長が相関し三尺以上にもなる、曰く「孕む・子持ち・池」と「鯉」は付合。『和漢三才図会』・『本朝食鑑』・『俳諧類船集』などを一瞥するだけでも、直ちにこうした情報が得られる。他にも口から食べた物を吐くといった習性や、琴高仙人説話からの「尾鰭はねる・大魚」といった連想が浮かぶ。これらはすべて当該の展開に有効な属性であることに改めて気付かされる。

例えば「懐妊と鯉」が付合であることは、咄の展開にこれ以上はないほどの符合を見せる。年を追う毎の成長ぶりとその大きさは、語りの第一部分に欠かせない要因である。高級魚なのに売らずにおいた、ということの内助の潜在的思い入れが垣間見える。紋についても、明確に識別できるかどうかは別として、鯉に斑紋が生じること自体は不自然ではない。その他一々の説明は省略するが、まさに鯉でなければこの咄は成り立たないことが了解されよう。鯉の設定と展開の青写真と、その着想の先後は何とも言えないが、上記の符合性を見るに、西鶴が円魚を鯉に取りなすことで脚色の方向性が定まったようにさえ思われてくる。

巴の紋を取り込む

鯉に斑紋が生じること自体は不自然ではない、と先に指摘したが、その紋を巴に限定したのは、西鶴の働きである。その拠つてくるところとして、網島大長寺の「鯉塚の由来」が指摘されている。『撰陽奇観』に絵入りで紹介されているこの話から西鶴が巴の紋を着想したという説は、近藤忠義氏が昭和十四年に提唱して以来、定説化しているように思わ

れる。簡単に紹介しておく。

漁師が淀川で左右及び鱗毎に巴の紋がある鯉を釣った。評判になり、死後大長寺で供養したところ、和尚の夢に現れて「自分は前世は武士で、殺生の報いで鯉になった」と語った。この話は寛文八年のことという。

西鶴がこの話を聞いて、鯉の目印として巴の紋を流用した可能性は確かにある。しかし、当時の大坂関係の資料にこの話が見えないのは不審である。大長寺の名は延宝期の案内記類(『難波すゞめ』・『難波すゞめ跡追』・『難波鶴』・『難波鶴跡追』・『古今声分鶴大全』)には見えず、『難波丸』(元禄九年)によりやく見えるが、逸話は記載されていない。またこの逸話が当時評判になった形跡も管見の範囲では見当たらない。元禄二年刊の『一目玉鉢』には、寺の記載も無い。西鶴の興味を引いた話題であれば、何らかの記述があつても良さそうに思える。果たして貞享以前にさかのぼれる伝承なのかどうか、『撰陽奇観』の記事がどこまで信憑性があるか、疑問が残ることを指摘しておきたい。そこであれば、西鶴はどこから巴の着想を得たのであろうか。

巴の紋は水の渦巻き模様を意味し、浪と付合(『類船集』)で、非常にポピュラーな紋である。従つて、特別な鯉の目印としてその斑紋が巴の紋に見えたと設定することは、突飛な連想ではない。読者にも違和感無く受け入れられよう。だがもう一つ、ここで別な観点から巴の持つ意味を提示したい。

「巴御前の俳諧化」が、その意味である。本話全体を支配する好色の気配の中に改めて「巴」を置いてみると、「雌なれどもりりしく確かに目見しるしあ」る姿形に、巴御前の面影を重ねることは不自然ではない。

この読みが承認されるとして、次に咄の構想に関わってくるのか、或いはこの場面のみの言い捨てなのかが問題となろう。

女武者とはいえ本妻山吹に対してあくまで愛妾の座にあり、義仲と最期を共に出来なかつた恨みに迷う、という女性像(当代の巴像の把握は、『平家物語』の木曾最期、謡曲『巴』、『現在巴』などとほぼ重なるものと考ええる。)を異類婚姻譚に置き換えてみれば、自ら姿を消すしかない末路も首肯できる。『類船集』では巴の付合に「きその思いもの」がある。本話に立ち戻れば、まさしく鯉は内介の「思いもの」であつた。ちなみに謡曲『現在巴』では「木曾の麻茅生かけし中の。よしなかりける契りのすえぞと行方も知らずなりにける。」(謡曲二百五十番集)とあり、内介の女房を脅したあと(鯉は)行き方知れず「や(鯉は子を)吐き出し失せる」という表現と符合する。以上、鯉に巴の面影を見、それが咄全体に及んでいると考えてよからうと考える。

西鶴は巴御前を異類婚姻譚と結びつけ、何食わぬ顔で内介に鯉を「巴」と呼ばせる。表向きは巴の紋が浮き出ているから、という理屈が用意されているが、同時にそこに異素材の転合化を読み取り、西鶴の作意を見るべきである。この部分が架空咄への発端に当たり、鯉が人間と同一化していくための入り口に当たるとを思い合わせれば、この呼び名が重要な意味を持つことに改めて気付かされる。「名付け」によつてこそ、鯉は人との蜜月に入つて行けたのである。

以上、(一)では語り口の側面から本話を分析し、(二)では鯉と巴の二点に絞つて本話の構想と作意を探つた。この手続きを通じ、語り口の秀逸さや好色を効かせた当世化、架空咄からの現実回帰、異素材を

結びつける有り様などが明らかになつたと思われる。この咄も「行く末の宝船」同様、ストーリーやメッセージ性ではなく、西鶴の語り口や転合化を楽しみ、ウソや誇張に運ばれる心地好さを味わう軽口の咄なのである。なおこの咄の挿絵について言及する暇がなかつた。「行末の宝船」同様戯画であることは一目瞭然であるが、考察は次稿に譲りたいと思う。

四 おわりに

前稿『西鶴諸国はなし』の原質(一)において「西鶴の軽口咄の独自性」という観点から行つた作品分析を、巻三「行末の宝船」、巻四「鯉のちらし紋」の二話にも広げ、それぞれの語り口・構想・作意などを考察した。何れも俳諧色の強い、軽口の咄という点で共通性が見られることは明らかで、前稿で指摘した特徴は、本稿で扱った二話にもほぼ当てはまるものであつた。即ち、構造の単純さ、誇張やウソに引き込む語り口の秀逸さ、末尾の現実回帰、転合化などの俳諧性、挿絵の戯画性などで、これらが共通して見られることを、再度確認しておきたい。

ところで冒頭でも述べたように、本稿はあくまで『西鶴諸国はなし』の原質追究のうちの一大部分であり、二話の分析は次稿に予定している四話のグループピングをめぐる検討のための手続きでもあつた。本稿の目的を達したところで、副題に示した「軽口咄の方法」について言葉を足しておく。

前稿及び本稿で扱った三つの話を軽口の性格の強いものと結論づけたのであるが、初めに述べたように『諸国はなし』全篇には、より現実性の高い話や笑話・怪異譚など、当代性の勝つた軽口の誇張咄とは方法

を異にする咄も多数ちりばめられている。作品全体に目を向ければ当然次に問題となるのは、当該の咄が「西鶴の咄」の中にどのよう位置づけられるのか、という課題であろう。ここでは、軽口誇張咄とは趣を異にするグループの方法上の特徴や傾向を抽出した上で、両グループの比較考察を行うことが不可欠となる筈である。こうした問題意識の上に立つて、本稿の副題を「軽口咄の方法」としたのである。

〔注〕

- (1) 「原質」の語について、先に説明したことがあるので再録しておく。「雑多な説話群である『西鶴諸国はなし』が当初柱刻や目録題にある「天下馬」として企図されたものであるとすれば、説話集「天下馬」の企画段階において核になつた話群があつたと思われる。その原型となつた話群には共通性があるのではないか、と同時にそこには西鶴の咄作りの原初的形態が見られるのではないか、それを指して私に原質とした」拙稿『西鶴諸国はなし』の原質(一)——力なしの大仏をめぐる——(『江戸の文事』二〇〇〇年四月、ベリかん社)
- (2) 前掲(注1)論文
- (3) 拙稿『西鶴諸国はなし』総覧——成立論・方法論への手掛かりとして——(北星学園大学文学部北星論集35号、一九九八年三月)において、その多様性を把握するべくいくつかの補助線を用意し、全体の分類整理及び表示を行った上で解説を加えた。参照されたい。
- (4) 拙稿『西鶴諸国はなし』成立試験——書誌形態を通して——(『国語国文研究』115、平成十二年三月、北海道大学国語国文学会、参照)。
- (5) 拙稿『西鶴諸国はなし』咄の創作——「八畳敷の蓮の葉」の構想と素材——
- (6) 北星学園大学文学部北星論集36号、一九九九年三月
後日譚と関連する箇所であるが、この「取り残されし人」を家族や妻とする解釈は採らない。すぐに帰つてくるというのが、この時点での人々の共通認識であり、選ばれた七人は運の良い勝利者、というムードがその場を支配していた筈である。妻だけが冷静に危険を察知しているとか、夫の好色目当ての船出を嘆いているというより、この時点では妻達も勝利者の身内として、十日後の土産を期待していると見る方が当たつていよう。
- (7) 「耳にも聞き入れず」の主語は上から読めば勘内だが、下に続く「乗りさまに繋げば」七人」ということになる。こゝは両者それぞれ別な意味で、選に漏れた者のことなど眼中にない、と読んでおく。
- (8) 七月七日を七日盆と呼ぶこと、盆初めとすることなどについては、既に井上敏幸氏の指摘がある(新日本古典文学大系『好色』二代男、西鶴諸国はなし、本朝二十不孝』一九九一年十月、岩波書店)。
- (9) 『剪燈新話』については早川光三郎氏『西鶴文学と中国文学』(滋賀大学文学部紀要3、昭和四十四年三月)、『伽婢子』については堤精二氏『近年諸国はなしの成立過程』(『近世小説』研究と資料)所収、至文堂、昭和三十八年)に指摘がある。
- (10) 当代の竜宮理解について、お伽草子系浦島太郎については林晃氏の紹介が備り『浦島伝説の研究』、平成十三年二月、おうふう)、竜宮譚については山本恵子氏の論考(『西鶴諸国はなし』巻三の五「行末の宝舟」の素材と方法——)、『国文橋』二十三号、一九九七年三月)が備るので、ここでは詳述しない。ただ、山本氏は主として浦島譚に言及しておられるが、『太平記』や謡曲、付合集などからの情報も加えると、西鶴及びその周辺の人々にとっては、俵藤太伝承も浦島に劣らず身近な竜宮認識であつたことは疑いない。以下本稿で

の竜宮理解は、右の諸情報の総体として考える。

- (11) 土地の人の話では、一面凍結したように見える諏訪湖に、湧き湯のため水の薄い危険箇所が存在することである。又、井上氏の指摘があるが(前掲(注8)書)、『西鶴独吟百韻目註繪卷』二十三に「跡へもどれ氷の首に諏訪の海」の句がある。転落事故は多かつたと思われる。

- (12) 玉取伝説による。この伝説は本書巻一「公事へ破ずに勝」の冒頭でも触れられている。謡曲「海士」に「龍宮の習に死人を忌めば。あたりに近づく悪龍なし」とある。

- (13) 人選に漏れた「取り残されし人」が嘆いても勘内は「耳にも聞き入れ」なかつた(注7参照)。結果的に一人取りこぼしたのであるが、彼の使命は、「七月七日に七人の男を連れ帰る」ことにある。ここに七という凶の数字があらかじめ定められているのは間違いない。

- (14) 前掲(注8)書
 (15) 周知のように、夫が行方不明の場合再婚が認められる。例として『懐規』の四「案内してむかしの寝所」などがある。

- (16) 『俵の藤太物語』や浦島譚のいくつかにも竜宮に誘う契機として化身した美女が登場するが、本話のように「好色」が全体に亘って強調されることはない。

- (17) 『日本逃亡幻譚』(昭和五十三年一月 朝日新聞社 百九十二頁)
 (18) 『仮名草子集成』巻二十一(一九九八年三月 東京堂出版)の解題によれば、天正期といわれるものを含め近世前期の写本は計三本確認されている。

- (19) 本書巻三の六「八畳敷の蓮の葉」冒頭の挿話と、『奇異雑談集』巻五「硯われて龍の子出て天上せし事」との関連。前掲(注5)論文参照。

- (20) 叙説六 昭和五十六年十月 奈良女子大学。『西鶴試論』(平成三年五月 和泉書院)所収。

- (21) 鯉と淀は付合(『俳諧類松集』)。「和漢三才図会」他にも「淀の鯉が最良」とある。

- (22) 本文に挙げる狂歌の他、太刀川氏は『近世怪異小説研究』(昭和五十四年十一月 笠間書院)で、新御伽婢子巻二「水難毒蛇」を内助の淵の起源説話と推定しておられる。又「枕草子」淵は「の条に見える」な入りその淵が北河内の内助(ないしよ)が淵のことという。

- (23) 上方芸文叢刊3 昭和五十五年二月 上方芸文叢刊行会

- (24) 『和漢三才図会』巻四十八(昭和四十五年三月 東京美術)による。

- (25) 同様の指摘が井口氏にもある。前掲(注20)論文

- (26) 前掲(注20)論文

- (27) 『日本古典読本9 西鶴』日本評論社

- (28) 大長寺の「由緒記」他によれば、『摂陽奇観』にある「和尚」は中興、八代住職往西和尚(過去帳によれば寛文十年歿)と伝えられる。が、鯉塚に関する資料は戦災により皆無、碑文刻名は全て剥脱し未詳である。